頴田町文化財調査報告書　第２集

鹿毛馬神籠石 II

福岡県嘉穂郡頴田町所在鹿毛馬神籠石の調査

1988

頴田町教育委員会

序

史跡鹿毛馬神籠石については、昭和56年度及び昭和57年度において国の補助を受けて、その保存管理や、顕彰の指針となる「鹿毛馬神籠石保存管理計画」を策定しました。これに基づいて昭和58年度に国、県の補助を受けて、水門跡の構造解明と列石線不明部分の確定のための発掘調査を実施して、貴重な資料を得ていましたが、今回、九州電力株式会社の送電用鉄塔建替工事に伴い、建設予定地附近の発掘調査が必要となりました。

この冊子は、昭和63年２月から同年３月にかけて実施した鹿毛馬神籠石緊急発掘調査の報告書でありますが、わが国古代史研究の一資料として活用していただければ幸いであります。

なお、本書刊行にあたり、厳冬悪天候のなか調査を行って本報告書を執筆していただいた、福岡県教育庁筑豊教育事務所新原正典技術主査をはじめ、諸先生方及び御協力いただいた地元関係者の方々に、深甚の謝意を表しますとともに、発掘調査費用を負担していただいた九州電力株式会社に対し、心からお礼申上げます。

昭和63年３月31日

頴田町教育委員会　教育長　　白土 伊三男

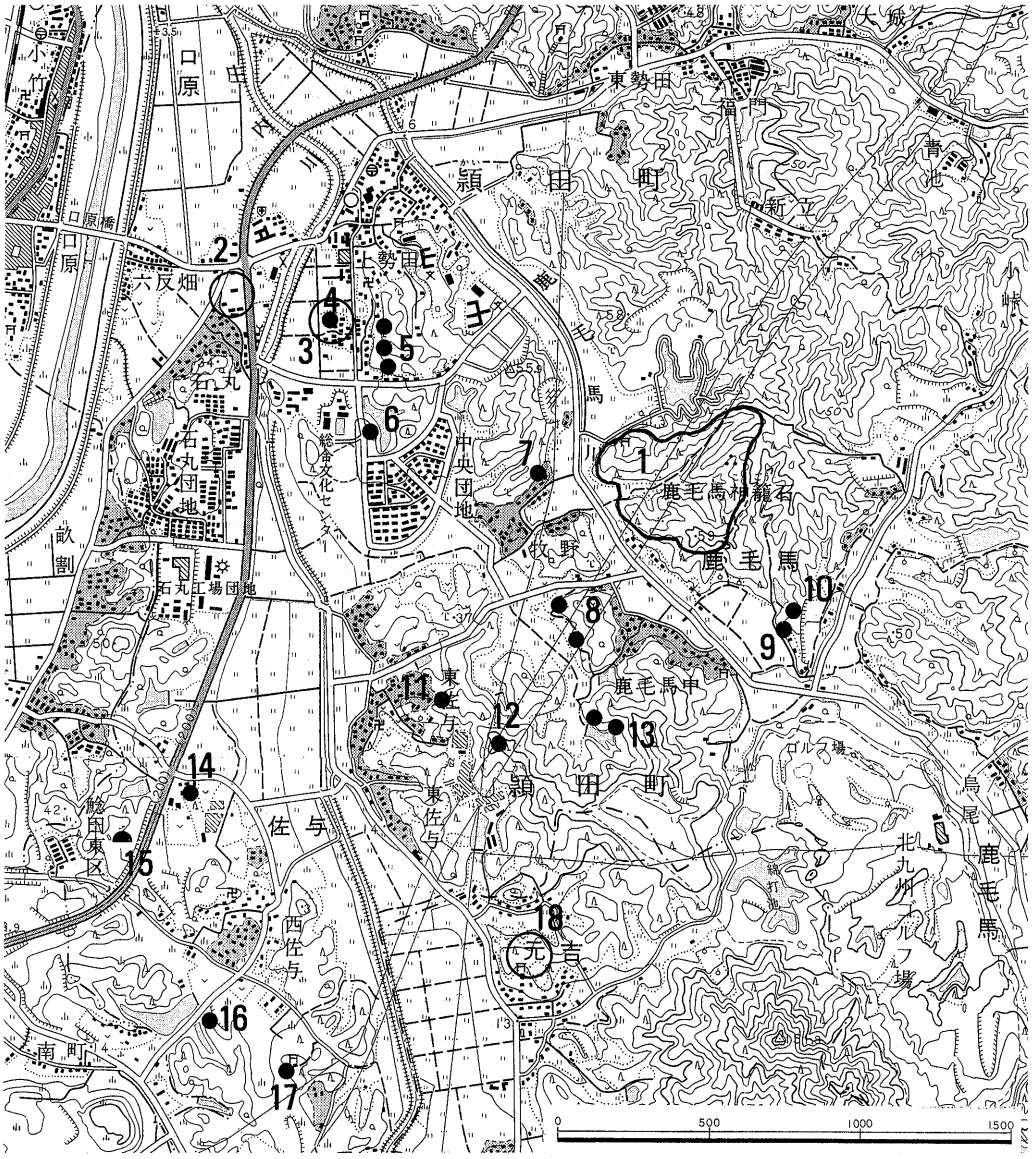
例　　言

1. 本書は、福岡県嘉穂郡頴田町に所在する国指定史跡鹿毛馬神籠石内の送電用鉄塔建替工事に伴う緊急発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、九州電力株式会社の委託を受け、頴田町教育委員会が行った。
3. 遺構の実測および遺構写真の撮影は新原正典があたったが、航空写真は九州歴史資料館のものを借用した。また、報告書の作成は九州歴史資料館にて行い、製図は豊福弥生氏によるものである。
4. 本書の執筆および編集は新原が行った。

目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　位置と環境…… 2
Ⅲ　調査の概要…… 3
　1.　鉄塔建設地内の調査…… 5
　2.　列石背後の調査…… 7
　3.　列石前面の調査…… 9
Ⅳ　おわりに……10

列石と柱穴（北から）



1．鹿毛馬神籠石　2．石丸遺跡　3．島遺跡　4．古墳
5．十郎古墳群　6．島奥古墳　7．きょう塚古墳　8．清水古墳群
9．古賀の下古墳　10．まさご古墳　11．鬼坂古墳　12．亀甲古墳
13．椿山古墳群　14．北の浦石棺　15．北の浦横穴　16．谷頭1号石棺
17．谷頭2号石棺　18．元吉遺跡、元吉古墳群

第1図　遺跡位置図(1/25,000)

Ⅰ はじめに

福岡県嘉穂郡頴田町に所在する鹿毛馬神籠石は、「規模大ナラザルモ東方高地ノ一部ヲ除ク外列石概ネ完存シ遺蹟ノ全貌ヲ見ルニ足レリ」として昭和20年に国の史跡として指定された。その後、昭和28年には水門跡保存のため、また昭和59年には水門跡の構造解明と外郭列石線確認のための発掘調査が行われ、それぞれ成果が上げられている。[註1] また、その前年には、近年の各種開発行為から神籠石を守るための保存管理計画策定報告書が出され、保存対策が講じられようとしている。[註2]

そのような中で、昭和62年８月九州電力株式会社北九州支店より、指定地に隣接して所在する上津役・嘉穂線No.67送電用鉄塔の建替工事に伴う事前協議がなされた。町および県教育委員会では九州電力に対し現状変更届の提出を求めるとともに、建替予定地の現地立会を行った結果、鉄塔は外郭列石線から東へ８ｍしか離れておらず、しかもやや平坦な面に建替が計画されているところから、工事前に発掘調査が必要である旨を伝えた。

昭和62年10月、九州電力より現状変更届が提出され、翌年１月文化庁より回答があり、事前に発掘調査を行うことで現状変更の許可が出された。その間、町と九州電力とで発掘調査のための委託契約が交され、昭和63年２月８日から３月15日までの期日で発掘調査を行った。

調査関係者は下記のとおりである。

総括・庶務	頴田町教育委員会	教育長	白土伊三男
	〃	社会教育課長	明星　輝美
	〃	社会教育係長	井上　正彦
	〃	社会教育係	安藤美裕紀
	〃	〃	高瀬　英一
	〃	〃	上野　啓治
調査担当	福岡県教育庁筑豊教育事務所	技術主査	新原　正典

この他、県文化課栗原和彦氏、同磯村幸男氏には指導助言を賜り、測量作業に際しては文化財保護指導委員八田保政氏、県文化課日高正幸氏、筑豊教育事務所島田尚子氏の応援を受けた。また、発掘作業にあたっては地元鹿毛馬地区の篠原大作、梅田定義、豊田シノブ、井手千英子、梅田トヨ子、安藤智恵子、安藤ホヅエ、梅田フキ諸氏の御協力を頂いた。

註１　「鹿毛馬神籠石」『頴田町文化財調査報告書』第１集　頴田町教育委員会　昭和59年

註２　『史跡鹿毛馬神籠石保存管理計画策定報告書』　頴田町教育委員会　昭和58年

II　位置と環境

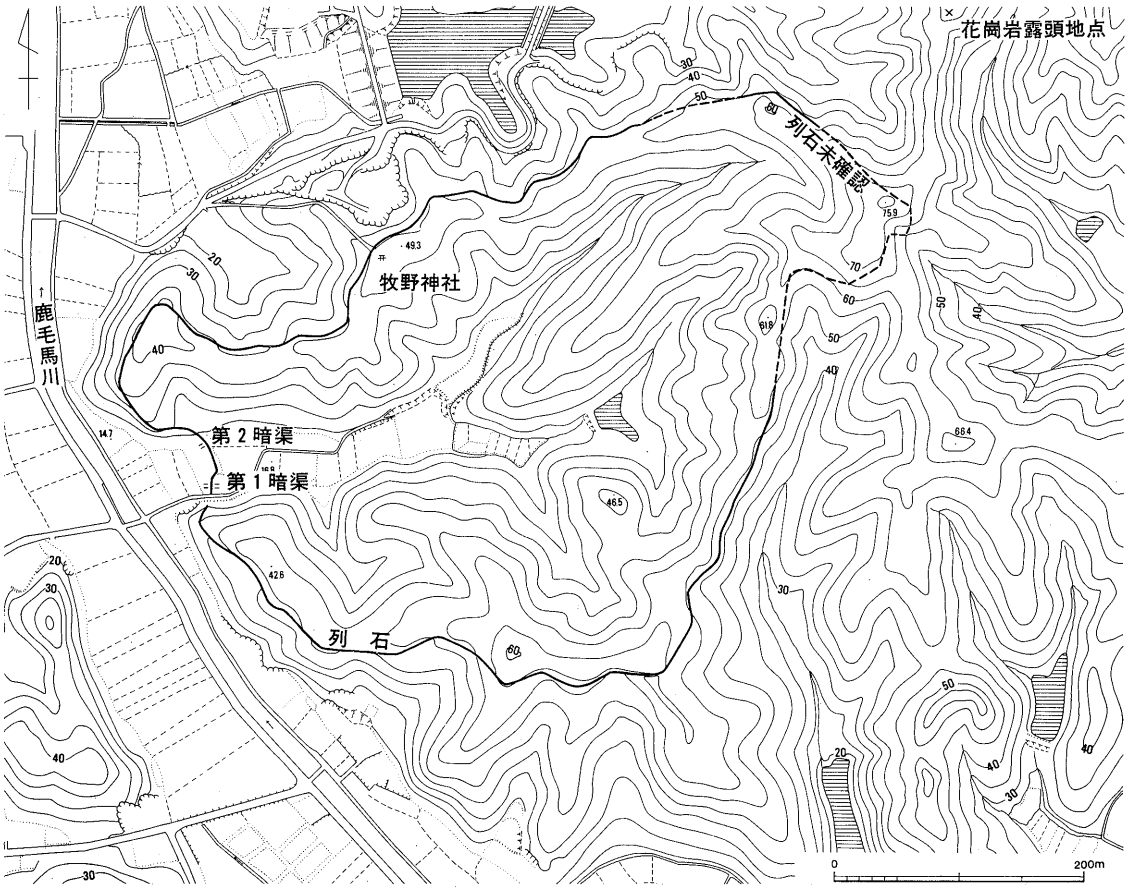
鹿毛馬神籠石は谷部の水門跡を中心として標高30～80ｍの馬蹄形低丘陵外斜面に列石がめぐらされているが、今回調査を行った地点は馬蹄形丘陵のうちの南側丘陵先端部付近で、標高40ｍ弱の高さに位置し、水門跡までは約100ｍの距離にある。地番は嘉穂郡頴田町大字鹿毛馬字田中995－３及び996にあたる。

当該地は南北方向に延びる低丘陵の鞍部に当る部分で、鞍部は東西が狭い平坦面となっている。また、鞍部北側の先端付近はやや小高くなり、しかも頂部には巨大な花崗岩の自然石が露頭していて、あたかも磐境のような零囲気が漂う場所である。また当所からは西眼下に鹿毛馬川を、東に水門跡につながる谷部を臨むことができ、眺望のよい場所でもある。

周辺の遺跡分布や以前の調査概要などについては前述の報告書に詳しく述べられているが、ただ昭和58年度の調査では水門跡から７世紀初頭から前半の時期とされる須恵器甕片が出土し、当神籠石の築造年代をほぼその時期と推定されている。神籠石の築造年代等については諸説があるが[註]、前回の調査は出土遺物からの検討で、その意味では画期的な発見であったといえよう。

また、従来不明であった東半部の列石確認も行なわれ、全長約1980ｍの外郭線が復元推定されている。

註　宮小路賀宏、亀田修一「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学』第６巻　雄山閣　昭和62年　には神籠石に関する問題点が学史的に整理されている。

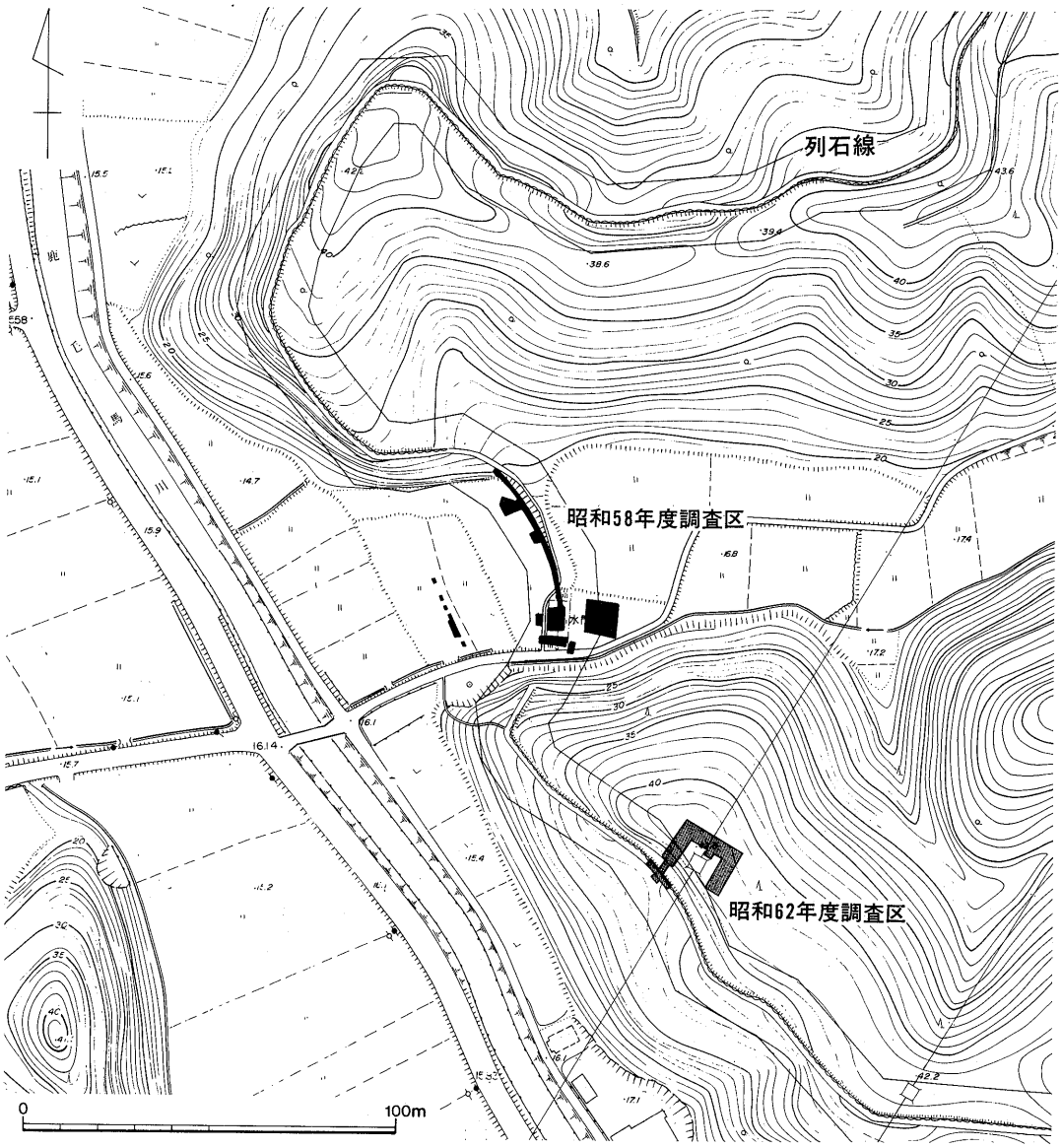


第２図　遺跡全体図(1/6,000)

III　調査の概要

今回調査の原因となったのは、送電線鉄塔建替えに伴うもので、現鉄塔の脚部間隔は一辺5.4mで、四隅が1m方形に掘削された穴の中に脚部が埋め込まれている。新設される鉄塔は現位置よりセンターを北東(列石とは反対側)へ3m移動させ、1辺7.2m西方、高42mという大型の鉄塔が予定されている。建設地の地番は大字鹿毛馬字田中995−3で九州電力の所有地である。

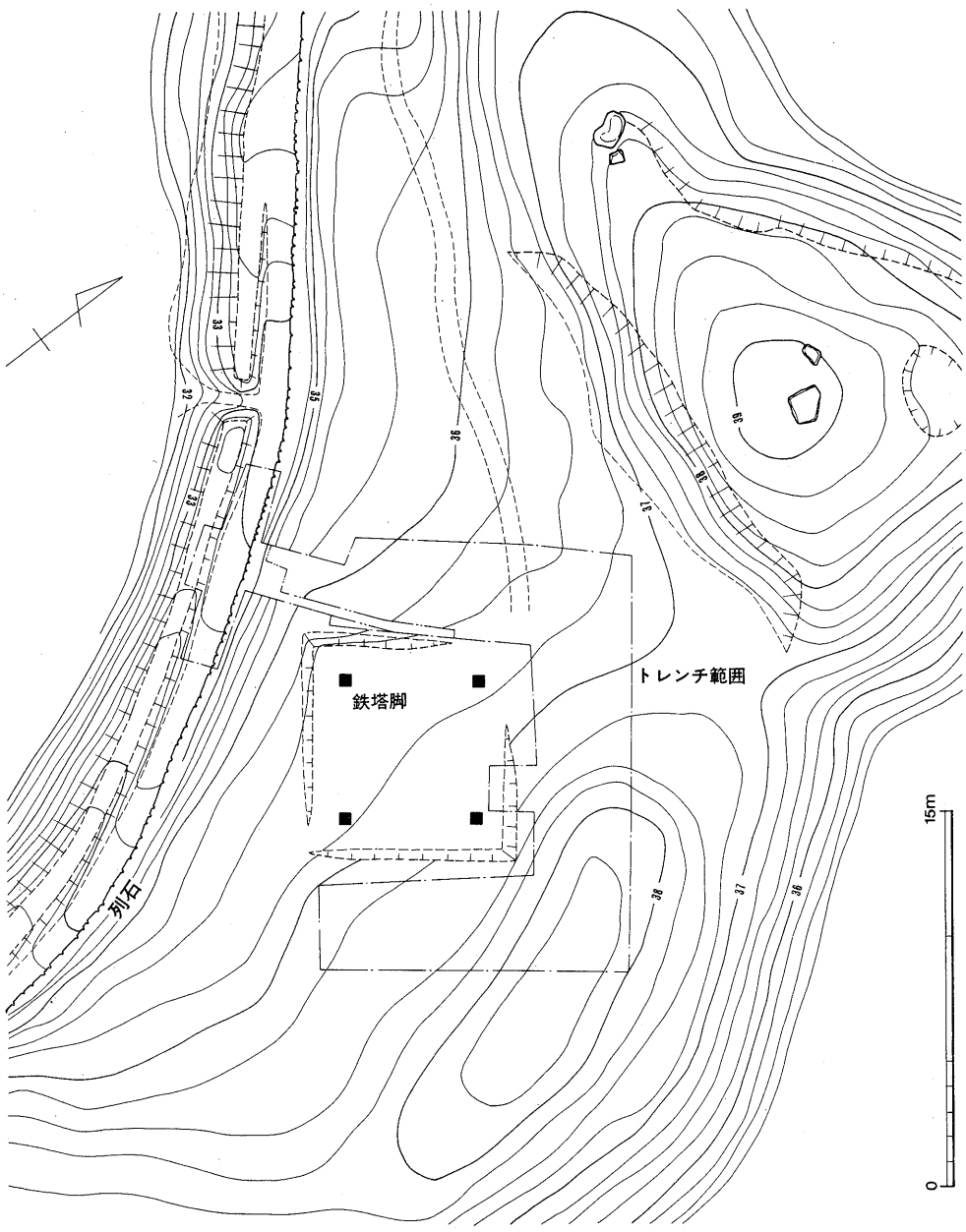
調査の対象となったのは、その九電所有地272m²についてであったが、北西半は現鉄塔が立っているため、その部分を除く約160m²について行い、コの字状に発掘区を設定した。また、伐根



第3図　トレンチ位置図(1/2,000)

作業中にBトレンチ西壁付近にて花崗岩切石の一部が露出したため、その部分を拡張した。

一方、現鉄塔から西８ｍほどのところに神籠石の列石が南北方向に走っている。今回の工事には直接かからないが、列石上土塁の損壊も著しいため、この機会に列石の後背地と前面の調査も併せて行うことにした。当該個所の地番は字田中996である。

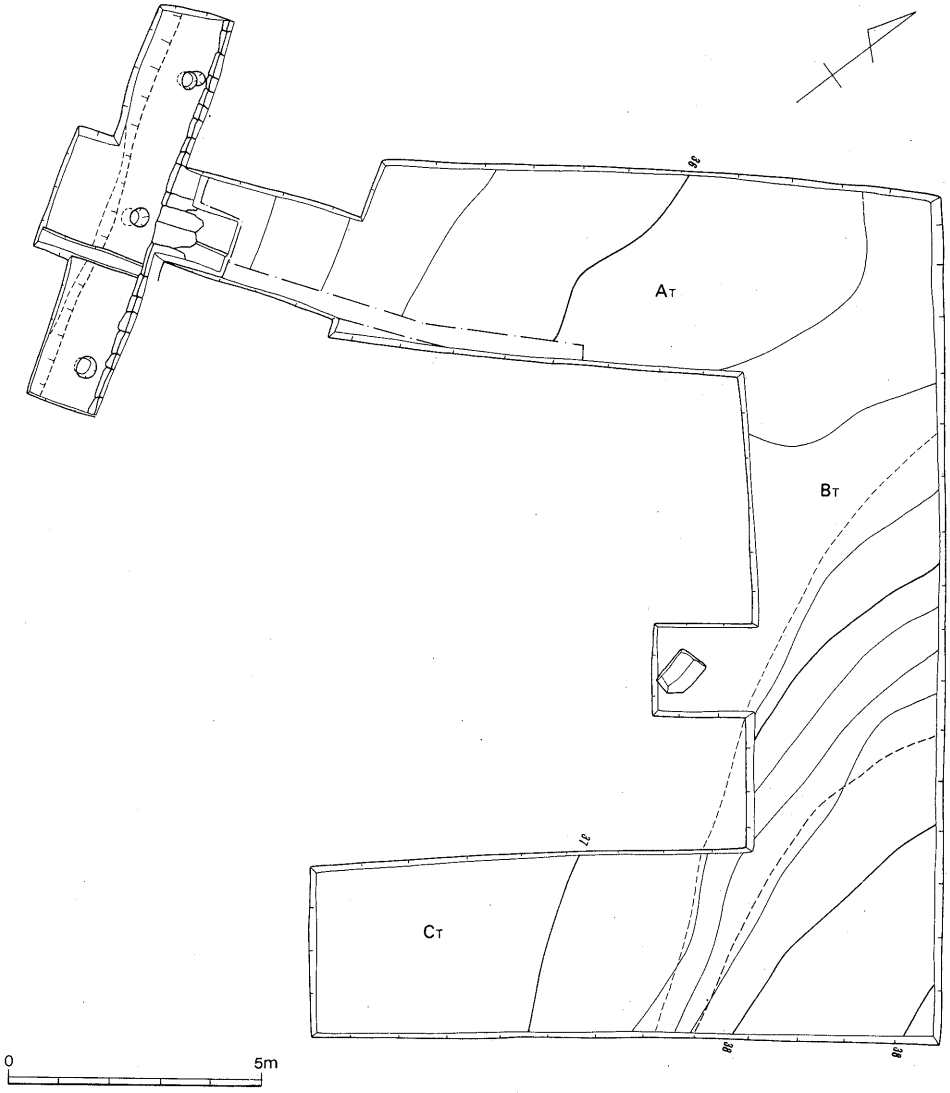


第４図　地 形 測 量 図(1/300)

1. 鉄塔建設地内の調査

鉄塔建設予定地は第3・4図にみられるように南北方向に延びる狭小な尾根で、東側は急斜面であるが西側は平坦な面となって列石付近まで続いている。この建設予定地内に3本のトレンチをコの字状に配して発掘を行った。最も北に位置するものをAトレンチとし、以下B・Cトレンチとした。また、Aトレンチでは、列石背後の状況を調べるために、西端をさらに西へと延長して列石上面の裁ち割りを行った。

以下トレンチの順に報告する。



第5図　トレンチ実測図(1/150)

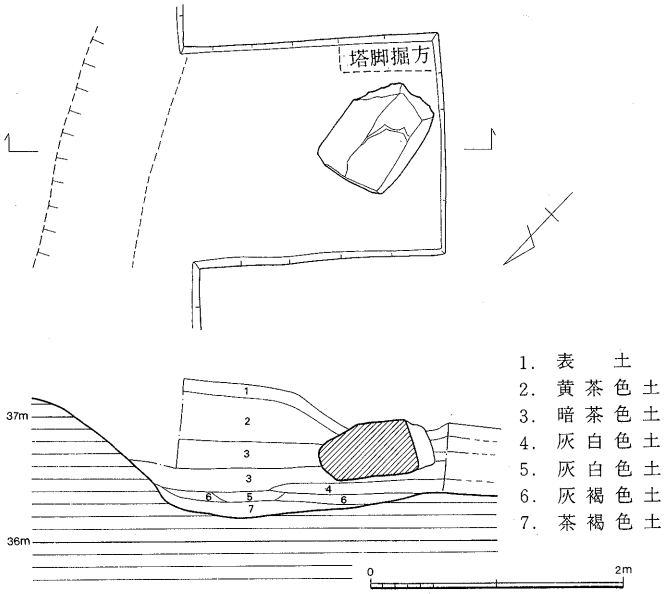
Aトレンチでは、トレンチ東端部は表土下30cmで花崗岩バイラン土（以下マサ土と略す）の地山面で、その中間は茶褐色砂質土の堆積であった。西端側ではマサ土の地山面が次第に深くなっていく。調査では基底部までは掘り下げることはできなかったが、列石基底部下の地山面（ここではマサ土ではなく硬質茶褐色粘質土）に続くものと思われる（第7図）。そのため、Aトレンチ南壁土層図にみられるように、Aトレンチ表土下の平坦面は、列石構築と同時に地山の上に版築を行いつくり出されたものである。しかし、この整地層面では柱穴などの遺構は確認されなかった。

BトレンチはAトレンチ東端で南に直交するもので、トレンチ南端は小さな高まりとなっている。このトレンチ内では、南端付近は表土直下はマサ土の地山であるが、北半へと深くなってAトレンチへと続き、30cm下で地山である。この面でも、遺構は何ら検出されなかったが、北半寄りの西壁付近にて表土層の黄茶色土より土師質火舎の底部小片（5cmほど）が出土した。

また、伐根中に切石の一部が露出したのでその部分を拡張して調査を行った（第6図）。切石と思われるものは花崗岩製で、長辺90cm、短辺65cm、厚さ45cmの長方体を呈する。南小口面は尖っているが北小口面は直に面取りされているようで切石と考えられる。また、この切石に伴う掘り方はなく、整地層中に埋め込まれたような状況で、しかも切石上面は南へと傾斜している。トレンチ内では他に切石は発見されなかったため、周辺をボーリング棒による探査を行ったが、対となるような石は何ら確認されず、建物の礎石とは考えられない。ただこの切石は列石に使用されているものと石材は同質で、形状や大きさも似かよっており、列石として使われてもよいものであるが、現時点では何故この場所から出土したのか不明といわざるを得ない。

Cトレンチは Bトレンチ南端から西へ延びるものである。ここは両端とも表土下すぐに地山であるが、西端側ではマサ土ではなく赤褐色粘質土の地山である。遺構・遺物は何ら検出されなかった。

以上、鉄塔建設予定地内ほぼ全面に3本のトレンチを設けて調査を行ったが、Aトレンチ西半にて版築による整地層を確認し、Bトレンチにて切石を発見した以外、柱穴などの遺構はみられなかった。また、遺物の出土は表土層からの土師質火舎片のみで、中世のものと思われる。



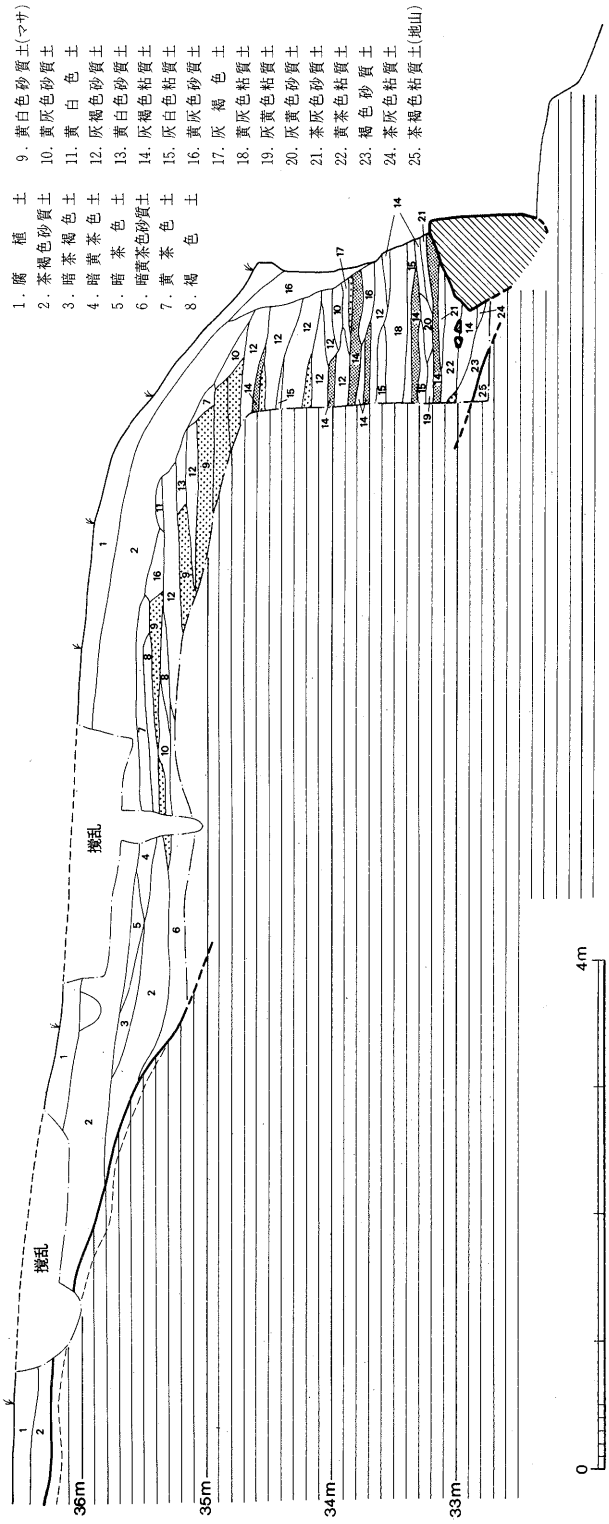
第6図　切石実測図（1/60）

2. 列石背後の調査

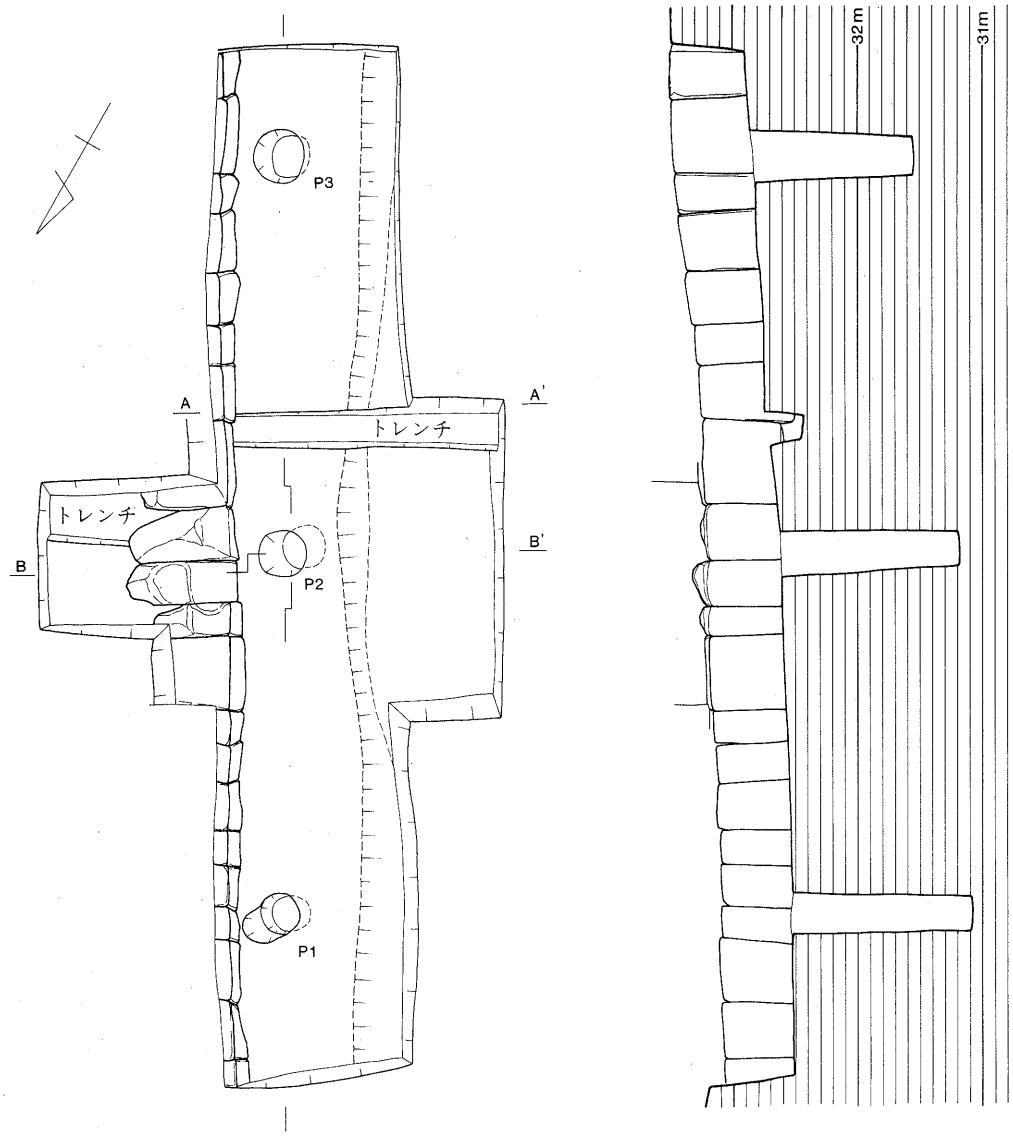
鉄塔建設地から列石背後にかけての構造を探るためにＡトレンチ西端を延長して調査を行った。Ａトレンチでの調査では、地山面が西へ次第に傾斜し深くなっていくのが確認されていたが、列石背後のトレンチ調査により、その傾斜した地山面上に版築による平坦面がつくり出されていることが分かった。ただ、日程の関係でトレンチ幅は広い所で１ｍ、狭い所で0.4ｍしかあけられず、また地山面まで達せなかったのは残念であった。

トレンチ南壁による観察では（第７図）、地山面は列石前面上端から背後に約8.5ｍ付近で急速に下っているが、版築はその部分より１ｍほど列石側によった所からなされていて、その奥行長は約7.5ｍを測る。版築の基底面西端には土留石として列石が並べられている。列石は硬い暗黄茶色砂質土の地山をわずかに掘りくぼめた中に裾えられている。列石の裏込めは花崗岩の割石片を少量混じた地山土をやや厚く列石上面の高さまで積んで叩き締めている。

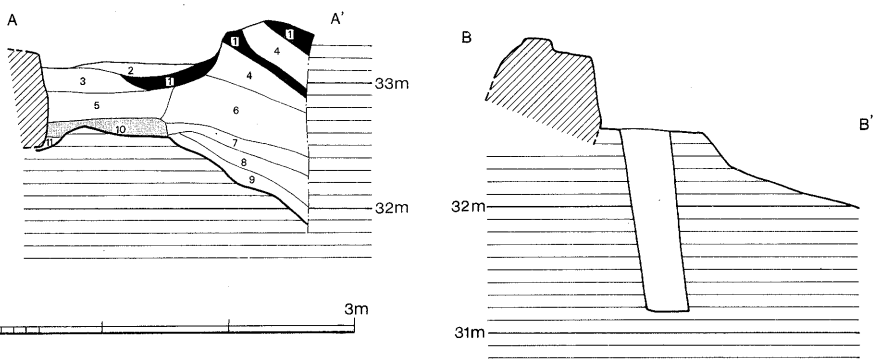
それより上は堅固な版築による平坦面がつくられている。第７図によれば、標高34ｍ以下では丘陵下部にみられる粘質性の灰褐色土を基調としているが、34～35ｍの間では丘陵上部の花崗岩バイラン



第７図　Ａトレンチ南壁土層図(1/60)



1．腐　植　土
2．暗 黄 茶 色 土
3．黄色土混灰黒色土
4．黄灰色砂質土
5．褐色土斑暗黄灰色土
6．黄白色砂質土
7．暗赤褐色砂質土
8．暗黄茶色砂質土
9．暗茶色砂質土
10．赤褐色粘質土
11．暗黄茶色砂質土



第8図　列 石 実 測 図(1/60)

土を基調として版築を行っている。つまり、列石から版築の仕上げまでには大きく３期にわたる工程が考えられる。これら水平に版築された土層は縞文様となって美事であるが（図版３－１）、調査時に打ちおろす鍬先からは火花が飛び散るほど堅固に叩き締められていた。

版築の厚さは、列石上で1.5ｍ、最も厚い個所では2.2ｍもあり、高いものであるが、東側へは当然次第に薄くなっていっている。また、版築層の上部には茶褐色砂質土が20～30cmほどの厚さで全体を覆っているが、最終的な整地を行ったものであろう。

前述したように、列石上での版築の厚さは1.5ｍで、西端は土壁となっているが、現状では65°の角度で内傾しながら立ち上っている。いま土壁上端部の崩壊等を考え併せると版築完成当時の土壁高は２ｍ以上あり、壁面もほぼ直に立ち上っていたものと推定される。

トレンチ内では柱穴や遺物の検出はなかったが、版築土中より少量の木炭粒を採取した。

3.　列石前面の調査

列石背後に設定したＡトレンチの西端で、それにＴ字形に交わるように長さ8.2ｍ、幅1.6ｍのトレンチを設けて列石および列石前面基底面の調査を行った。また、列石前面は現在通路として神籠石見学者に利用されているが、その西脇は高さ50cmほどの土塁状となって通路沿いに延びている。このため、この土塁を検討するためトレンチを一部拡張して土塁を裁ち割った。

トレンチ内で検出した列石は21個で、そのうち列石奥行まで確認したのは４個のみであった。列石はすべて花崗岩の切石で、幅は20～65cmとまちまちであるが高さは65～75cm、奥行は70～75cmと比較的そろっている。石の形状はほぼ直方体をなすが奥行部は三角形に尖るものが多い。列石は大旨縦位に並べられ、寸分の隙間もない。また、天端や石面もほぼ直線的になるように丁寧に並べられており、全くその構築技術の高さには驚かされる。なお、図版４－４に見られるように列石上面中央部に段をつくり出したような石材も使われている。

列石前面基底面では、トレンチ内で３個の柱穴を検出した。柱穴はいずれも円形素掘りのもので掘方はない。規模は上面径30～40cm、底面径30cm前後、深さは北端に位置するＰ－１が最も浅く1.3ｍ、他の２個（Ｐ２・Ｐ３）はともに1.4ｍを測り、深い柱穴である。これら柱穴はいずれも列石側へ内傾して掘られており、その角度は６°である。また、３個の柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２は3.15ｍ、Ｐ2～Ｐ3は2.90ｍを測る。柱穴内は軟らかい土が堆積していたが、柱痕などは検出されなかった。これらの柱穴は、第８図の10層（網目の部分）にみられるように、地山上に厚さ10～15cmの赤褐色粘質土層を強くつき固めた面から穿たれている。このつき固めた面は幅１ｍほどで、ちょうど「犬走り」状に列石に沿って延びているが、列石と反対側は急斜面となって下へ落ちている。このつき固めた平坦面の上部は軟らかい流入土の堆積であり、構築当初はこの面は露出していたものと思われる（図版４－３）。

一方、列石前にみられた土塁状の高まりは、調査の結果表土層の上に堆積していることが分かった。これは昭和10年代に地元の人々の仕役により埋没列石の掘り出しが行われた時の排土だと思われる。

Ⅳ おわりに

今回、調査の契機となったのは神籠石郭内に所在する送電用鉄塔の建替工事に起因するものであった。そのため、調査は建設用地内を主体としたが、用地は列石線に隣接するため併せて列石線の裁ち割りも行った。これら調査の概要については前章で述べた通りであるが、以下簡単にその成果についてまとめ、おわりとしたい。

鉄塔建設地内の調査では、当神籠石において郭内に調査が加えられるのは初めてであるため何らかの遺構の検出を期待したが、残念ながら目的を達することはできなかった。ただ、地形上、列石後背部の傾斜面に平地をつくり出すため版築による盛土が行われていることが判明した。また、1ヶ所において列石に使用されているものと同類の切石が検出されたが、切石は1個のみで、今のところ出土状況等から建物等の礎石とは考えられない。

列石線の調査では、列石背後の構造と、列石前面の柱穴の存在に的を絞って発掘を行った。列石背後については、列石上面から約2m厚に堅固な版築による土塁が奥行約7.5m幅につくられていることが判明し、列石は版築基底面端の土留石としての用をなしていることが分った。列石前面については、予想した通りトレンチ内において柵列と思われる3個の柱穴を検出した。柱穴は上面径30～40cm、深さ1.3～1.4mで、いずれも列石側へやや内傾して掘られ、その柱穴間隔は2.9mと3.15mであった。また、列石前面には1m幅に強くつき固められた「犬走り」状の基底面が存在することが確認された。この面に柵列が設けられたものであろう。

以上が今回の調査成果であるが、特筆すべき点は列石前面において柵列の存在が確認されたことである。当神籠石においては前回の調査で1個発見されていたが不確実であり、今回初めてその存在が確認されたものである。その柱間距離は約3mで、これはこれまでに確認されている佐賀県おつぼ山神籠石や帯隈山神籠石、それに福岡県女山神籠石の例とほぼ一致し、列石側に内傾して掘られていることも共通している。[註1] この柱穴間距離が約3m（唐尺10尺）であるところから、鏡山猛氏は唐尺の使用を考えられ、また、「神籠石の規格が各地各様でなく、柱や土塁の尺度まで画一的であることは、各地域に国の規制のもとに施行されたことをしめしている」と指摘されている。[註2] 今回鹿毛馬神籠石からの柱穴の検出で、列石前面3m柱列の確認は4例目となるが、各所の神籠石にこうした共通性がみられるのは鏡山猛氏の指摘を裏付けるものといえよう。[註3] ただ、今回の調査では神籠石に直接関係する遺物の出土がなく、前回の調査で推定された7世紀中という当神籠石の築造年代を追認することができなかったのは残念である。

ところで、前回の調査では従来不明であった東半部の列石確認作業も行われ、全長約1980m

の外郭線が復元推定されている。今回の調査中も何度か外郭線を踏査したが目新しい発見はなかった。ただ、従来の外郭推定線よりさらに外側で遺構らしきものを発見したので、ここにその状況を報告し今後の調査に期待することにしたい。

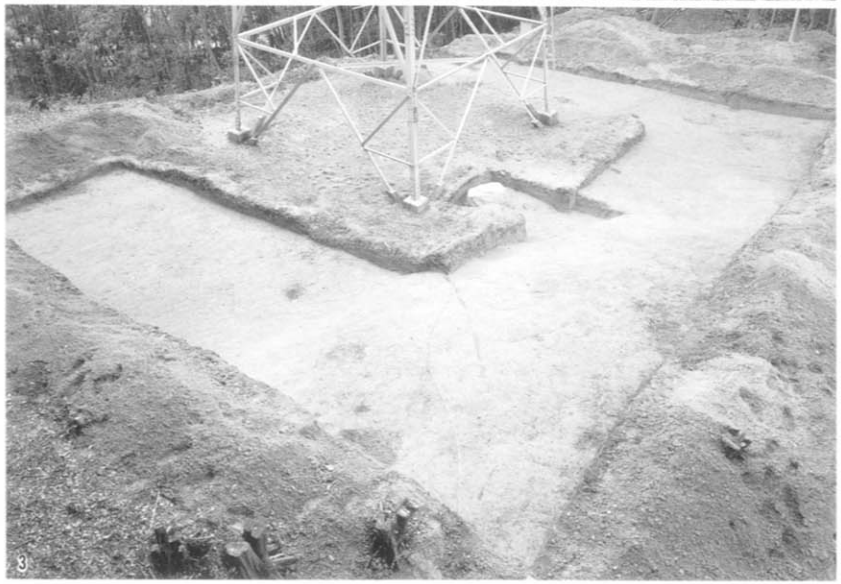
郭内の最高所は水門跡からほぼ真東にあたり標高75.9ｍの地点に位置している(第2図)。この付近での列石線は不明であるが、最高所から10ｍほど北東へ下った個所には人工的に造り出したと思われる幅2ｍほどの通路状の平坦面が尾根上に約100ｍの長さで北へ延びている(図版１－４)。また、その通路状平坦面の北端付近には図版１－３に見られるように花崗岩を切り出したと思われる露頭があり(第2図)、周辺には石屑が散乱している。今のところ全くの推測ではあるが、この場所で列石の石材を切り出し、尾根上に延びる通路状の平坦面を通って石材を運び出したのではないかと思われる。また、最近、郭内最高所から東斜面に下った地点において列石らしきものを発見したという話もあり、東半部外郭列石線については改めて見直す必要があろうと考える。

註１　「おつぼ山神籠石」『佐賀県文化財調査報告書』第14集　昭和40年
「帯隈山神籠石とその周辺」『佐賀県文化財調査報告書』第16集　昭和42年
「女山・山内古墳群」『瀬高町文化財調査報告書』第２集　昭和57年

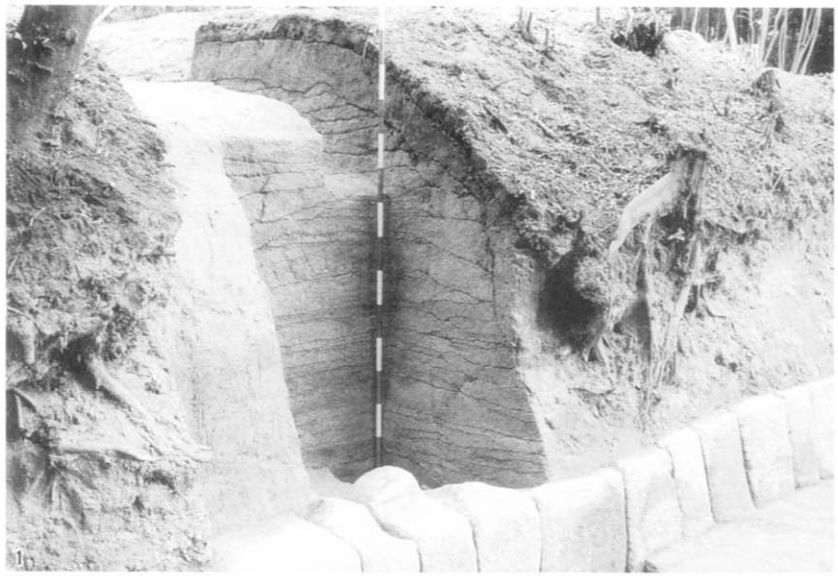
註２　鏡山猛「古代の城塞・西日本」『日本の考古学』Ⅶ　河出書房新社　昭和42年
同　「古代の城柵跡－西日本－」『新版考古学講座』６　雄山閣　昭和45年

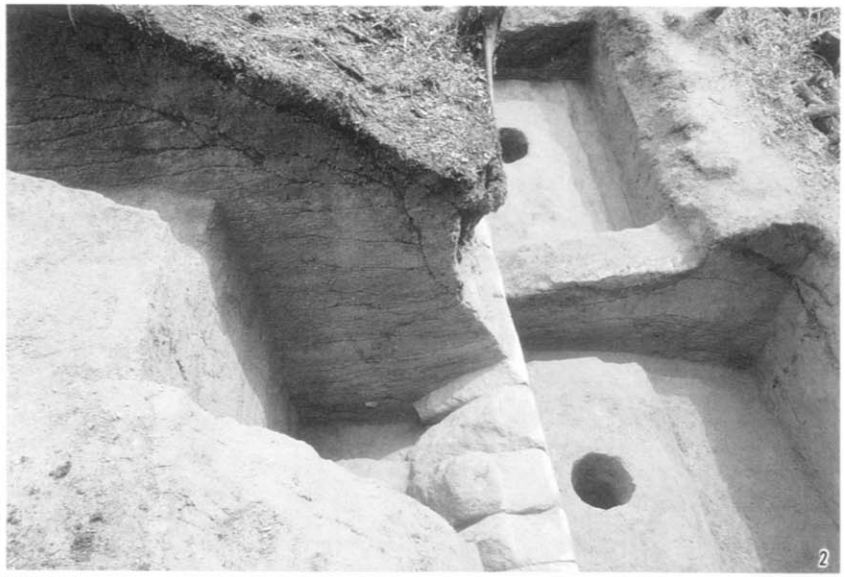
註３　阿部義平氏は、神籠石に伴う掘立柱については版築工事に伴う外側の仮枠柱であったと考えられている。阿部義平「古代の城柵跡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集　国立歴史民俗博物館　昭和57年。

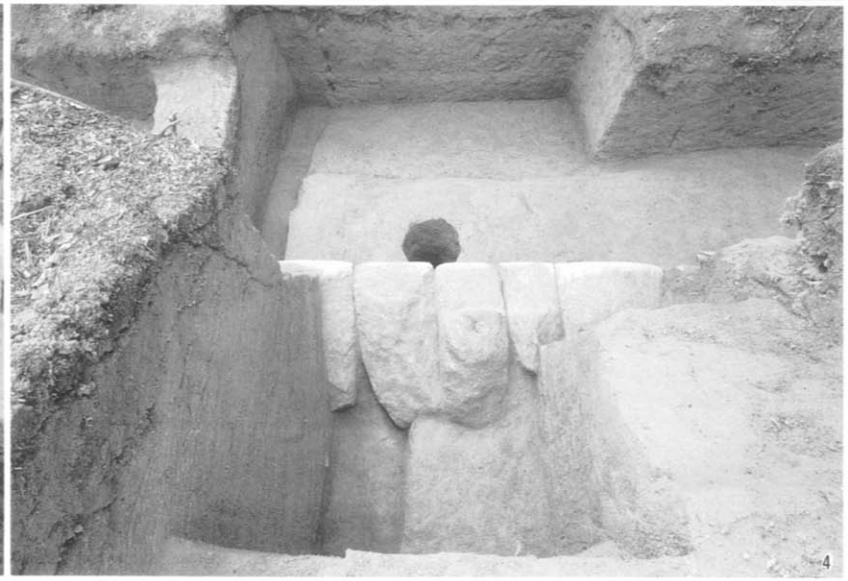
1．遺跡航空写真（西から）　2．調査区遠景（西から）　3．花崗岩露頭状態　4．通路状平坦面



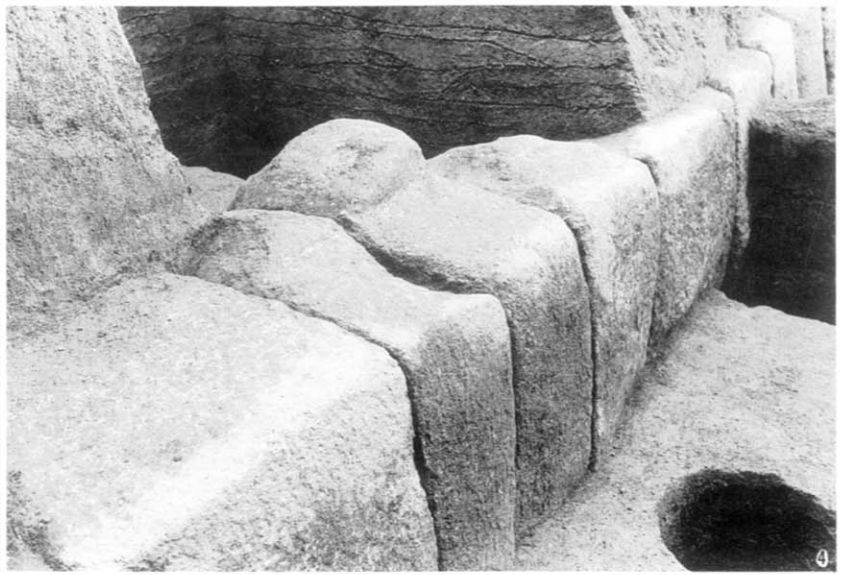
1．調査区全景（調査前，北から）　2．調査区全景（北から）　3．調査区全景（東から）　4．Bトレンチ出土切石







1．Aトレンチ版築状態（西から）　2．列石側面（北から）　3．列石前面（西から）　4．列石背面（東から）



1．列石前面柱穴（北から）　2．列石前面柱穴（南から）　3．列石前面土層と犬走り状平坦面（北から）　4．列石上面の段

鹿毛馬神籠石 II

頴田町文化財調査報告書 第2集

昭和63年3月31日

発行　頴田町教育委員会
福岡県嘉穂郡頴田町大字勢田1271－1

印刷　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31